



文庫20
357
2



伊地知氏書冊

僧 藤上

上 嘉佐野

得雲やゆらん見へる者わき
やま井のめしけれの給よ

傘おろ月ふらふら
本母さふまのなまあしけの
名月やそ住者のつら
急不月

小くくくたつ月やゆ石浮
雨

弱とめて金貫指りあふ
川筋の園をふいらふ



秋月やいらさむうの男山

水相観の繪と

ふささきてよめをおもひ求ひし

名月や居酒のまじりと頬あり

得蟹無酒

懈を画てたま遣する月に

名月や五そのうと松の影

雨

納屋のゆゑ吹雪さけお月

名月や舟を定むるむら雀

曇らとよめ泉起て月の色

あつこき

更にと祢宜の軒や枝の月

紀川いづせあり

きつらう葉あひあやころ月

新思

心よもあつこき十四り

名月や金くさむまの雨の友

園のあひ吉原はうらりお

月生きてははれなくお毎うふ

人音や月んとぬに伏見村

維摩のりし

山のそと大衆しりり床の月

張良圖

胸中乃共出るあこ月

布袋の月を掬し誇ふ

ありてあき水の月をや爪を

寺

ちの月あこしう膾ハ世々もん

名月やうやくあこ袖に怪

ホウレての
鳥帽子屋ハ急何三引んじり月の

閑倚橋

猿這子あこしんや橋乃月

含杏亭

雨まよ入目を元標やまお月

風雨

雷子揃ハあひきこ月らん舟

小野川けんきあうは餞

入月や琵琶を袋あちあらん

三日禮をつむいあ

名々十歩は錢を握りけり

巴江

聲のれく猿の齒白し暮れ月

舟中よふていをもみそと侍るよ
こころの枝の楫よゆらゆらを

月入るも杖よつかけら小舟よ

琵琶の音をよむ

言わよ比巴を興へて夜も隔
陽のあよ思ひおは酒をよ
灯をきよめて深まいやすよ
村雨の心をあはれし私御の耳
をそよよめり感あはるる十三
より字はらう曹保々秘曲
もはれおんを泣くむすけする

すまひもてりりよこたえさり
其夜困あるつて所と色をひ
とむらもあはあきてさる好運
松を投出たうせ風情及ん
一藝何れやさいつと

十五酒をのこもてけあの日

あさつて舟よつとみを入る
月をこぼす水の干す
雨のしほりしうたふ

おのつてあつたを誰月を舟

所懐 京よそ

いそめ事こころを名有きよのう

母と月とけるふ

あつれは雨乞政乃十三夜

旅泊

ふれりや江尻て三種湯千三夜
葉研てハ粉炊かろすう島の月
住の江や夜芝居さそ浦れと
白玉子芋を交まやけり月
ほの自上の太子れあおら
去るとすむ茶師が旅子の
あつれ確り日傘

十三夜を

やよみ月あつ物あき木松可

因十五夜

お乃直來ハ
に産ありとせ

御番元ハ照月をらん
瀬河舞

平家源氏の
舞月夜

宿あしののちれては月あき

柴少のいあつる人

名月や皴者人の心世流
あつれ人を抱手を膝尻
待望山
てよみ満里棹のめとみる鳥

契不逢意

国の灯も光るを陰や袖の月
一休の狂詠自画を写し

甲申 律師め相刺をて月茶

松前のまけ子

送り侍り

こそあうを大根て 清さん 秋の月

十六宿ハ儒者と名ふる 海

漬蓼の穂子 丸月を ちあうふ

日十三日

笈の菓子ちて ちあうふ

病中制禁好

松栢乃津海嵐をうすや月友

秋宅

ひ汲をかてみそやけの月

宗因の月をうすの月を

芋川 凡俗都の二百貫

ちあうふ ちあうふ

物うのとちあうふ 袖の月

鐘声 客船

名月や市堂の鼓の音て

遊子の馬あるな松の峯も 江の月

馬鳴や弓弛を三れを身は月

玉津橋陽を

わこのいさつのお井の月をおたふ
いさよみちや龍眼肉乃つら衣

上交諸上

平家こち系記おひり

吉野の山あきせし

こよひいれすしあけいれこの月夜
せそそりり

新改の月らん所や九月を

九月廿七の月を惜

る月や大い思をぬり

石の家と合

又月や陰を感じはる故屋の中
ちやや暮あよみ入て笛をす
屋合中いよよ瘦せの風つらり

雨好

散や石をかりの橋もよ
早名ぐら里お一夢あひま

新居

塀梢ふりくよか銀河
天川けあのちじや一志海り

あふきよて

踊子をまてりくく星ハ地

侍能

刺精も廣くふ羽をりけり
毎てに松つけたりけり
二軍をぬむ隣のももあま
かきしきや丸ちのふよこ川
早急や女のふりあてあふん
何あひや焼えあぬる言新
丸柳の治り筆とれ早も

地敷りのありて

星阿しや双林塔者鈴木の音
橋と成鳥ハいつき夕あつに

七月歌の饒肅山字

あけては海ら籠る燈し相の秋
首花や角立も星北あつら

小娘の生はきこきりしうけ確

中風涼し 花火の筒のわき音
橋をさそも 逆橋も ちや
玉川のあそび 花火賣
この水は

水汲の曉起やすまの 船

増上寺晚景

馬老也 灯籠使のたき入

まゝらうらうら ちや

水子の敷くよりの 橋の傘

弄化生

あいらの子 家と ちや 天川

柳徑よみ あり 僧の
袖より ちや ちや
りの授記 島の有無 價宝珠
と 説せぬ 心を ちや

衣あり 橋と ちや 玉より

水が島子 あり

慈山火を 荳のま けや 玉座

あまうら 門の ちや ちや

ちや ちや 人 ちや 隣の 玉より

得平酒

洲の 隣 あり ちや 生 ちや

陌上塵

桐陰下けあつき北阿つた
見る人もとらう打籠中口りりり
送りもや一室あつた煙十文字

千之よ 黄茶茶子あそあ

お豆あをのつれ一山乃二んは
稻つまやまのめふあふいあ

妻よおれては
あつたあつたあつたあ

らあつたあ思あつたああああ
伴勢の鬼あつたあああああ
あつたあああああああああ

舟興

をあり花火百のあつたああ
扇的あああああああああ

あつたあああああああ

あつたああああああああ
鬼灯のああああああああ

悼コ齋

其人の軒はああああああ

投られてあああああああ

よき衣の陣りやあさる丸
ト石や志よこよぬれてせお撲

氷のしりやあも賣やお撲札
相撲氣を髪月介の夕ふ
山城のおし流ぬ形や活西風

遊品部

本屋や六尺は人唐めり

中の御よ

幸清り夢のあつきや昔松

雨後 二句

いせせわけ松
あま久る芭蕉よのりて
群吟を雷お顔よつと
其舞の日陰ありあり中
舞よの立よのやあ
株のおや度よりけて小松原

種竹 三年

竹乃色許由ういささおの情

つらももろはああり庭の秋

長生を交野をわたりて
角ふまやいせの飛飼乃花爲
思ぬわじしつあや秋の音
芦の程や蝉をよもしておぢん
客至
碧池汲ゆる女の場や夢のむ

暮草薺とらふま
お影よふあふと卒のうみ
花もじし佐助のほ乃草を愛
酢をとあま隣の花盛

三遠なす納

子稻酒や稻荷よひおた姥めと
病のちやほ草おくおあも後
頼招やちもハせ人よ虫包と
野店無肴核

足あふる亭をよもて新酒は
酒買子りるあおの唐紙

ゆ芽おきて

化野や焼のらじの骨はらり

春日法樂

と哉日秋の春借をりけう山
四所の宮の春借をりけう山
成の刻をがまりけう山
野外夕虫とらふ歌あり

蜻蛉や狂ひ走つた春借をりけう山

相模川洪落水接天

狼の浮木ありやや秋のあり
二挺立の帰棹
髪をぬれ花の運ぶ星のあり

新既や松よあけひの清田を

こぼらしきの歌あり

甲斐野や江産くくと柳おたう

新中や岩あかしく元宮根

みの海より入る素牛あり

破きん孫おる春借をりけう山

阿る長者のありけう山

中なる小孫ぬき春借をりけう山

和の秋意

さしの椎の音を仕すハ礎りも
奥好の殿やうつくしうの夜

きき里小野の虫はのほろりて

音雨ハ屋ももたもたぬらむ

葎や御舟の所との眉つくり

あいらのわくくすり扇

関守の心ゆるすや栗かまた

大和の舟のちり物いそ

泊ぬめ小柿の志のよきを悲ひたり

蓋源庭心

清澄や流杯さりすあは

葎狩や山の阿も申こも虚ろ病

め中の葎くりり

葎おや鼻のそとあるもあは

舟中

あいらの田まの並あや秋の音

秋のや弱もゆるくね鞆の上

稲葉んよ女侍そつすのこい河

畑のを屋上の杉をもあは

隅田高橋之記

饒新殿

法幣弱ふ海をぬる賜自の家
松虫の孤をえんれを友とあし

はあやうといせきうりて

好むも隣を包みおむの巻
すむりや舞をうてける蚕

夜る山

冷虫や松明をてへ荷をせて
山川や松をみ越ハるる音のう
きりてこと于山田の畔の夕花

二見あて

岩のうへに非風塵しとれ唐

長谷越

山畑乃半ぼる所をた依松系
川昔の委平あるや谷乃あ

遠別二役川をたは舟を
りりゆりゆり推河豚とらふ
逆水大切新をこころ

お權よ難ははるりり淵の色

一夜前裁とりあを

岸城の八何子入やうをみあ

切惣亨よりして

日盛を帯傘とせ萩の汗
水の以て

萩の汗をひかりやササキ

既松亭

獅子舞の胸分りあすの萩

楓子亭

ぬいぬい雉の内併り
こゝろに

井筒を略しる昼よ

いそぐと竹輪をむす小倉

田家

庭木の卯うみ控へ蒔種ふ
妻臺ふ稲ちん窓ふ多田

饒青流難波

芦刈のうらを喰せて破り

隣家よもと控こくを

大絃ハ晒にえ控りある雁

元結のゆるるすは虫の声

おきり二節の貝をとらて

あけ出乃見よりておは新酒か

帝脊月灯を憐

古寺や 洗紙 少主人所ふ

駿府市番子旅しちあしるふ

くうよ子 妙持ころも木洗桶

日仙石玉まふ所があまは詩の

萩すりや 傘にうは 昔鞆

あつみのくうのあ

花子 志太 糸

三粟のくうのちりや 角被

在東寺まで

偽甲の志つらや ちりあ 藤うふ

松のそふの火生しけ 藤 藤

感微和者あふに

そをちや 髭衣よ 玉に

品川 泛鉤

唇の腹ん送るえや 舟以上

白雪よ 壺の遠出と 教と唇

あふめ 喰そめ

貽啼や 赤子の 頬を吸めり

呪檢よとりす 泥や 百舌の声

泥衣の 野よ 遠よりよ 小

曳尾

鶯が長上系

うゝ花の袂や 女お連
ぬ是果のころを

二子山二子ひねりし粟のうゝ

尾引浄教まで

燕もおものはらみうらうて

賈固や夢のけしきまほし

鹿の一声とらふうゝの

ふゝを誰り傳さしる鹿の声

はばけや 西子色よけ流

木過ぎまで

門立の袂くふおる男鹿うゝ
小糸や ぬ糸とくく 蕙の尻

秋葉禪定の所

合巻着て 女よすうやあきひち

下山

ひしきふ杖を投りあやう

芭蕉ぬ 岸蘭を悼める詞あり

嵐糸一子 孤懸を何それむ

芋の子も芭蕉の 秋をわらふ

めがねのあつたゆしとてなほ
おちのきこせをあげく人よ
おりのあは八思ふあまよとく 秋葉

二月堂あまのりりる年七日
新倉の借堂のこころ
いふこゝろをいふ

日の目だぬあはれまてゝは松平
甚五たあつちあら

けい懐狂をせとつてあは
産寧坂くつりて

兼おあまをいふとて ちかり

戸部山庄

むら松桂の實をほしく白
ふちりてあまよ掃ち松平

あまよ山を

谷くつけ麻のおまきれ松平

三乗橋上

片腕ハ都よのこころに松平

あまよ人のいふ

おあまよハちかき酒のえ
お娘の涙うら流にわみち

菅根

杖の上よりそらんから村にあり

高雄より

け新嘗文算家をくらしせし

泊濃より

杖に依る家のあまのつせ山

山形

石後よお祭はくしく片与の山

いせより

お祭のし能無の拓といはれり

南をやちのつこをの山はかく

南天の突を包めやや唐の巻

南天や秋をうはゆる小倉山

くらの山乃繪ふ

笈の角楯の巻ふ志しれきり

七十の歳とそくすくするの度

いつくは稲を于瀬や大井川

山の端を下しあはすや破れ笠

水郡

唐鉅を流る水やあはれ

旅思
卯句

富士

笠取をいふ土の音は立時雨に
あそびやそむ心をさるる下風

背面達しを画て

御帝より留守とてしる
秋の風

旅思 二首

こつこの指節らや秋の昏
みろくの路や一人のむせりせり
召こした訓お方や花層
うら花やるも餅くよらんのか

本多下総守より
席侍宴

後園

りきぬけの庭や澄摺菊の冬
手の内乃敷こわけてこくは秋

旅行

駕の籠み濡て山吹の菊を三つ
志何し子にたを何ある菊の宿

荷今うらむ老 厭はく

土室のふきこいせりやきよの菊
きよの菊小僧て来る花はこ好
こくの鳥や靴よりあむらあふこ

白鷺の墓石もあり
菊重——地子這菊を先ねん
こい准よふののくりれ 袋菊
素堂 孫菊の屋
け菊く十の北酒乃亭主あり

昼菊

さくく白く蒼ハ極ふくねり

菜苑

菊を切ぬ極くもあがり
水鼻 ふくさめくぐり 菊絶

病起 千山ヨリ菊ヲ
病起 千山ヨリ菊ヲ

大母衣乃りし ちを扱や靴の菊

三つあて重陽

門酒やうる金の腕乃きくをお

宮川のやぐり、酒送せられて

重箱小花あそびの野菊か

みちとせのそとに各よあそぶの筈
あつあつける子 ありひよりて

ゆつて我七百の所走菊よるん

竹苑のやよあそびをい
うつりて花奇あそび

出世者乃一ものありしつくり菊

翁はひるの交むよにせり

時服之菊菊よハましく此色ハ

十日菊

親世殿十日の菊をかめて

女子を給うひそ

おかけらんひそ

かみ屎よらんらんむの妹が

十日菊

震宴のおアもろもろ菊 贈

笠きしと西りの曇よ

菊を着てらんらんあつあつや

袖の浦とり貝アしよ

白菊を貝の内実よせん袖の浦

那岐な丸赤れあらんらん

市連まの言林とあま

大工まの久いお教や神の秋

御高まろあてしなりし

御穂をえして髪あまの

内宮 法輝のを拜なるふ

刃の燐や赤子もおいる赤松山

あま

日ハ照て古殿ハ旁のかくも

いつれもくわあまの

たしや小判あつて葉のふ

平津川よそ

花江は祭主の菓を送りたり

冠里公侍りしすし祝きて

初度や墓六場を以て百足持

周位を齎の昼よ

自前と一升入乃めくす

栗家の菓を渡す

かつと来て福原淋りり立

元禄辛未のころ大山榎島へ参詣

お川 紀りお書略之

品河もつねあつじ厚の音

とらの

稻塚の産塚子つく田守が

後決

宿とりて東を回やこれの月

いせ京

あそを離く乃考麦 畠

御向松よ

生栗を握はめしる 山後村

大山

綱押やうろ岩根乃りみら

石廬する宗僧

手み提し茶瓶や片めて苔の音

二間茶をよそ

白うの尾髪吹さるるきり

由井のぼる

物言ふ一のなるおや海のおと

雪乃下みやうらうら

破うら宿の庚子や茶乃初仕

霏思尤乃古樹のよそ

有一代の供奉の扇やちる

横ル追悼

一緞をよ白まとうや新巻

酒より初を切懸しとる

一字を探るゆま間を

あいせをね おをちてこの

自画雁

斤是ハヤのハム之小田の唐

秋のこれ祖父のあつりあそ

白扇倒懸東海天と云ふる句
つまげりてつみおあててまよ
みそりしむらむせしるこのあはれ
を皆立おほひて山の半腰より
つれづれなるを要よりすそと
いそんと存りたりとて

白老の西又は弟や普賢富士

未曉吟

澹つふよ階子ふ立てらる菊ハ

洞房の茶を象見生その笛を

好げりりせしるを悼て

とろくや笛の為ハ塗只履

悼朝叟

此人ふ二百十ハあはれ

吉田氏

唐拒も糸をさしらるる向邦

芭蕉翁十三回

辰や夜や風尾の音かきしるる

室永三成十一日サテ
妙身童女を葬りて

春の鳥居土子かゝんも被さしあ

秋世月からう権うき室に
さぬや福宮の湯流乃秋世月

玉津橋よも

師弟を病より悪しりこも

高野よも十月三日

卯塔の花表やけりも秋無月
雲うらひ片日かりやあゝ
阿比寺けと時ぬまの聲の
心あや葱臺乃 片柳

芭蕉每三回

志らくや比も舟泊を墓糸
帆上げ舟泊を比田のみぞ

遊金閣寺

八雲の楠の板戸をまわし
藁を志して遊ることをあ夕し

大和めぐり世比

あつむる之論の近たをう

芭蕉翁病床

吹井より病をよみし時

治柿の夕日をかざるみ

飼猿乃川窓つよ志く

時あくる解下のそりて

しるれあつあまのらあ酒の
もこりあつあまのらあ酒の

弟麻さかろのめん

小松の命をあにまゐる山

當院の冥宝什物すあく

中みも小松との松上

箱の上子馬蹄とらうを硯の

くみり形容と

松陰の硯の息を志く

世そちさぐりけりけの房を
えたりてし

三尺の力を西河乃くおろ

本多総列公平信康の夜
あゝ雨とひびくかきりの
鳴るるを教りせよと仰し

蝙蝠や柱を捨つ侍一連

守山の子よりを昔時あふ

とりの月のおろさる籠りま

あふハ強きを流しや

揚りおるのる女下りま

神の旅酒匂ハ格とあふり

家こ乃弟や居よとて大社

大和らりりせり

ころりりの城の寒さやのり

使者指書院へ通るさむさ

井波門主應心院殿

あゝそらみとあふ乃二集
あゝそらみとあふ乃二集

風や沖よりききよのすれ

あゝの家と

御流に戴乃まきと

紅葉の下衣も何しぬのさ

玄格とや祖父のうさふ枝お萩

く羽の者けああふお及花

つゝ綿一お鬼の耳をうたふ

大町新宅

お仙や一鏡ついでのお時を
水仙や花ふりや星月夜
雨や一羽のけしきや狐の尾
控ゆるや何〜〜はうよみおれり

又り醫師あれを戯子

純汁よ又本村の咄り
何脈あ〜お水のも〜りや下河原
何〜りけん藤魚は〜白きを
表戎十九日〜〜〜〜

大黒の〜せ〜る家よそ

酔はめそ大黒あ〜夕〜り
おお板子小判投りり共備
糸屋十右衛門宅あり

湯原山や都ハ内江戎が
人妻ハ大根は〜りを純汁
お猛子鮎も互りすの笑ひ
生煮を〜〜〜〜あ〜り
世中お舅をよめぬ〜〜汁
日本の風呂吹〜〜〜比叡山

あけぬの浦おのりて

純ひらりとくまらる網戸

幻住菴よりて

雑ぬの名とくらあつこみお
蕪汁や粟のかりたもとぬん又

宗隆尼みほりつあま

千那みくして聖田(り)とて

薬もみよじりくる合せこのお
蜜の刈蕪おくりやんあま
秘伝うけ端のかるや籠た針
沈げや祝まのこす能戻り

あつりふそぬまおん並切

柳きく馬ハ昔の憲法と

霊山のみちよと

かおのそりのるまを死ぬ枯舟

生活新五上京

流の末乃扇翁あふりり

聖のまのやあけ

縁雛泣は徳者るん畑の粟

ほろめ

神楽子何とあつるそ舟乃中

志りくくもやあし 枯木乃夕附日
周旋をまめて

うゝひらる三井の二王や冬木立
風や勢田の小橋乃花をこ滴
芭蕉翁をこまきりて

おを指をすいひりそ遠やむじき
石菖の音もあれはあやし水あぶ
か生のしゆのふしつをばそ

繕くく子よらしん 強縁はを
あしせ忠の重宿や 奥子お着

起出てる志げき力や 足袋路中
寐んやこころあそこのさめを中
子着てくく路中もこけしる

長途狂倡

奥子きん ぼる濃も 舟大井川
目ぼりをを氣おし 路中の信世お
山をわぬるをる 色よの目おきし
何とあくを 水隣をばれきり
け木戸や 韻のこれておの月
果はや 二を あまきり 京月夜

新宅 二句

竹の場乃の庭如し炭俵
氣もゆるさずんを象

をさあ三十五りよ

おほふはすしぬ袖を納豆汁

霜月朝日の例を

法人や 嵐芝居をを象

好柳の市店

人をんしぬのこゝおも夕涼
新うせや暁いさむ下邨の橋

お豊老足七千の歌平

白河の海をかたや桐火桶

幡別あらしあつふ一倍のすき

あつふ六十年の宗花を派

沼子きりあて終りを取

はらふに神をさしこり

や一筆もゆるるあしきみ

粟飯の焦て白あや霧の声

法雲寺老僧春色とほりこり

原のや季吹の家の夷講

はひり片を福永住あいろん
蟻のふし白のこもや葉の菊
控らんるの切さそて火あふ
鬚質の葉木賊のひと葉枯より

汝のとう其根うをけろ構
咆のうせ貝を並みて焚き
と名好くらりよせて
炭賣の炭くもをりれまやこを
柯求老人の名向
山茶をや福のれくら盛物

あく障阿のやさよ浪のうと
开くれて木補は流るあつた
山行

山火をるう奥出に雲おこのか
みとほしおんあう池の邊
寒芦画讚

何ふぼしくし家いそけおの解
氷もも盛とらと 鴛の中
住吉しし

世をのひあをよより流すや冬の海

用防とありて方ある人まで改
る行もよ一生非ありひるま
をめぐ板くつとあやとや
この中よりやけら海が
ひらひ出さる

火燧く青磁と砂を拾りり

斤もお落しる火神を幸の
ものありと

忠直と灰よりくく火鉢ふ

名もこのりたらあ下
新字

炭よりみ磁のぬり
手標は

三年成乾の圃み入

燭の舟や沙をよある金の甲

炭竈三句

炭や子の指とゆし巻のき

炭よりや冷床龜井、朝の松

炭よりや豚のほお鼻をん

炭竈や煙をぬけた猿の声

かすくも其木おより後か

うつら火の七曲をきけやちり

地男は辛やく人ら、其薫に

炭屑みやくはる木おを

とてあかの一車とあめ炭

寒蠅炉をめぐらる

悟ちれてあうあうあう人の蠅

口切や袴のひびくは流薩葡萄

梅津某糸田一良かき
粉至の宿まて送付て

こゝよ春を愛志つゝ一綱代さ

天居安慰

あゝ雪の幅をたふぬや灰せり

山中 高客

袷卷の松よりさや三種のぬ

並肩ハひく子の謝や寒作り

十石ハ答ふつくこけりあんと

冬川や篠のすいすい舟の糸

雨倚橋

うけし水や澄もあゝ橋柱

岸幅や氷の中よわさうり松

裡一いつりりりあうまほら

煮凍や箕貝子の竹乃くす疎

弟友

内務の古酒をゆらや室の梅

市隅の倚る

宮世果をばけしあはまを矢念賣

揚屋のあぢきあぢきあぢきあぢき
野の毛をけりてこころ

野の毛や 笠の袋にたすけ
心もや 釜のゆきうらあぢき
浦瀬にこそ 湯石と 大新時
細衣をよとらるる 座の古釜
塩櫓子や 投てこめいふ 磯
よき日 和よ月のうらあぢき
妹のよハ 嵐の足のとらあぢき

薩埵山にて

汐波の猿首七郎のうらあぢき

新く鷹のうらあぢき 菊の舟

京のうらあぢき 案内にて

高伊豆のうらあぢき 池乃答
滝只のうらあぢき 池乃答

人形講 月吹よ

沖の帆も 十のうらあぢき

あ國橋上 二句

兜の鏡のうらあぢき 寒念仏
雪のうらあぢき 雪のうらあぢき
酒飯の飲酒ハ けりあぢき

去来家まじ

千々々らか海川を舟に

ことく九州を六やじし海に

南都よわえつる時

寒色や南大門のふも徳月

ひさし帯のちりりあを

かりひよのせなうら

うれとまう縁起すんて里津棠

お神棠や鼻息白く面の内

雪買ふをを治さや雪の音

清水飲ひみとをりて

あーれ雪の舞臺の日は気色

知恩院所ふ宿とりて

初雪よあつたうららのあつた

大津やうららよそ

雪の目や船院との顔の色

ひらひらの宿めて

馬りよ貧乏いふ雪の宿

寒山のうら

あつ恩よ門の雪はくを食ふ

西運寺興行

初雪ふくものるるの伏ん舟
あ雪とあつひの煙一笠のうへ
とんやや赤子ふんする おお
はりやや 雀の枝おの小土黒
門よりふ字を留く

るふ炭はをそへぬけ雪の門
燐屋

窓鏡のうき世をぬにゆきこふ

官城御普請成終くと詠家
ゆ襦袢美ぬりるをける出

陪臣ハ朱買臣之申す乃袖

色蕉を居をさうと

表老ハ蒼もあけは 庵の音
門の音 梅阿りやとさわすしり

山居の傳り

雪をぬき猿り茶を煮たりた山さ

かも川よ一あれとあみこも

釈かたよふ路も雪の黒いふりふ

あつてをこむる女のあつてね
こーやをけいさめりり

醉吟

雪うしややりのをりす小忌衣

望叡山

為雪や 大の字枯る山の葉
戸障よりおどろい雪し松乃声
かいかしや 竹田へ帰る山守の言
旅女土作をむくく
人の子らもさむく

黒塚の客あしらひや 国乃言

立徘徊

げつ雪や内よぬさうか人き准
めつしい物う降おん垣あうか
野川の雪を秩論よちらんりふ

或師方より言かんぬもくを
ぬあう上か

初雪ふ物やえんれそなもさう

楠の鉦壺四回一回とや
万客の唇をくちらせ

まつ雪や湯のこ所の大壺壺

ゆもすそい川と云わたり

半袂の岡崎とありや雪の松

人も来ぬ夜は独酌

初雪や十子成るけ酒のこし
軍兵を園茨てまらや雪碓
松の雪苔ふつこのけりきり

前よりよき雪のり

歌集の人みなりつけしの雪

おきかぬ魚のさしこちかみ

出づり

すきくも犬を拂わ袖の雪

たてしあるとらよみ

ちかぬや控をあるふきの宿

市中深

初雪や門を橋ある夕ちかき

不分當春作病文

酒をて病を悟ゆ一に雲は

極月十日西吹大坂の月

いとほや足袋賣よまじつ山

新堰めて食らわやうの師走

餅礼や灯もくく壁の籠

餅と鹿と宿はきくくく

やうれそ又や狹道よめり

書如しをゆと一斗の巻柱

座右銘

以事や登り取りたる見書
乳母ふえて去るも羨女前忘
御前中百殿よりくれり
のりおの中は眠り

年忘れ刈白倫を可いきて

震渡流火志つありて

妹ふも薑とけて餅の番
煤掃てぬいおふ女房ありや

京より春をひらけり年
かりの猫も回るあり

以幸の牛はひらけり年あり

臘鬼五つの子を産り樊中よ
やふも少くも物ありけり
可きといひ

年をとりふ兒は親へ熱ぬ豆
すけりひ粥と焼て世控
童ふも志とろ既中や煤をひ
忠信り芳野仕とやあはれ

宵かしの親の悟氣もあはれ

用窓は羽帯をめて

煤こもるとつもと人の隙あす
鼻を掃孔雀の玉や煤こもる

御煤翁ハ竹取

千山家と一高小

割すもやハと女神楽男より

揚屋と一醉房して

意の手差紙巻を吐くく

身の布をされをあらはし羽織よみ

小形城行てあらはしと一共皆

山陵のま方を海へす一はすけ

女子の疵瘡一はるあや

餅の粉や必雪ふるる津の味

行高云可る海無は巻袖

系あけらメをあげたる津菜帳

市隅

弱法師家門ゆるせ餅の札

燈籠屋の夕日志らせ手杖寄

糸と松あまの市の夕あし

自悔 三十

子をのこしはきつあふきき自の思

大津驛

千観のふるもせりやとらるる

雪窓

損料の史記をゆきをの雪をか
年の所やひらぬのむねの物思
以てや終評定しおめを



